
大人へ

風之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大人へ

【Zコード】

N50130

【作者名】

風之

【あらすじ】

好きな相手に告白されたのに、返事を保留にした主人公。その理由とは。

（前書き）

昔書いたものを、そのまま載せました。校正なしの、気持が先走つた作品ですが、当時の自分の気持ちをそのままにしたかつたので修正は加えてません。大人になることの、当時の僕なりの答えです。

ちなみに、主人公に嫉妬、もしくは殺意がわくかも知れません。お気を付けください（作者は書きながら嫉妬しておりました（笑））

「もし、よかつたら、私と、付き合ってください！」

春。昼間。誰もいない体育館。少し離れたところにはキャンパス。目の前には、緊張した表情のあこがれの相手。

頭が真っ白になり、思考が追いつかず、何かを言おうとする。口を開き、閉じ、また開き、また閉じて。その一瞬の間に頭の中を廻った思考。三度目に口を開いた時、強く吹いた春風と共に、返事の言葉が流れた。

そいつは一度、恋人に振られていた。

高校二年生の秋に付き合い始めたが、進学先が別々になつた彼女に、フランクなのが大学入学直後の五月中旬。そうして半年ほどかけて立ち直り、今は新しい彼女を大学でつくり付き合つていた。一人目の彼女に告白しようか悩んでいる時、その彼女にフランクな時、いつもそいつは自分に相談をしてきた。恋愛経験もない自分に。それでも、そいつのことが心底好きだつたから自分もない頭を絞りいろいろなアイデアを考え、助言もしようとした。結局のところ自分はほとんど役に立てず、頑張つたのはそいつ自身だつた気がする。

そうして現在、めでたく大学二年生を迎えた自分は、そいつの家の呼び鈴を鳴らしていた。どたどたと音がして、引き戸の玄関が開かれる。

「よ、いきなり邪魔して悪いな、岡島」

そう言つて呼び鈴を鳴らした張本人、真田弘樹は手土産のお菓子を持ちあげて見せる。

「別に気にしてねえよ。久しぶりなんだし、とりあえず上がれよ」

そう言つて真田を家の中に入れた岡島俊は、先頭に立つて歩いて

いく。真田も後に続き、一回の岡島の部屋に案内された。

「なんか飲み物持つてくるから、適当にベッドにでも座つといてくれ。お前紅茶はダメだっけ？」

「できたらコーヒーくらいはじけたやつがほしいね」

「了解」

そう言つて岡島は一階へと降りて行った。真田は岡島に指定されたベッドに腰掛けながら、部屋の中を見回した。

窓際には壁にくつつけられるように勉強机が置かれその隣には本棚。反対側には真田が腰掛けるベッドと、壁にはクローゼットがあつた。クローゼットの隣にはコンポなどが置かれている棚があり、写真縦に入つた写真が飾つてあった。

以前来た時とほとんど変わつていない部屋の中。唯一変わつているのは、写真縦に入つてある写真の一枚が、今の彼女と一緒に写つている写真だということだけだろうか。

その写真を見て、真田は少しだけ胸の部分を抑える。写真に写つてゐる一人は笑顔で、とてもうれしそうだった。その幸せそうな二人の笑顔を見ていて、真田は胸がどこか苦しくなるのを感じた。そうしてみると、扉の外から近づいてくる足音が聞こえ、やがて二人分の飲み物を持ってきた岡島が表れた。

「ほれ、希望通りのファンタ」

「俺、いつファンタがほしうつて言つたつけ？」

「コーラくらいはじけてるぜ？」

「確かに。サンキュー」

真田はお礼を言つて、一口ファンタを口に含む。口中で泡がはじけて、心地よいしびれが下の上を走り抜ける。

「で、いきなりどうしたんだよ？ 直接会つて話したいつて？ 好きな女がようやく出来たのか？」

岡島が机の椅子に腰かけながら聞く。岡島は以前から、真田に好きなやつはいないのかとしきりに問いただしていた。そのたびに真田ははぐらかしていたのだが。

「あ、もつやの女の子に告げられた後なんだけど」

「マジで？」

脊髄反射ではないかと疑つくり、素早く岡島が驚く。そんな反応を予想していた真田は、平静を装つてファンタをもう一度口に運ぶ。口の中ではじける泡の感触とともに、高なる心臓を抑えようとする。

「お前、好きな子いたなら言えよー。つか、自分で告白しろー。」「いやー、説明すると長くなるんだけど、告白するのはもつやひとつあとこじよづかなって思つてたんだよ」

「ウソ言つた。怖くて告白できなかつただけじゃねえのか？ へたれか」

「いや、今回話したいのってそれに関する事なんだよ」

岡島の顔が面白半分の表情からすこし疑問を持ったものへと変わる。

「それに関する事？ お前が告げられて、付き合つて始めて、その経緯でも話したいのか？」

「いや、話したいつてこじよづか相談なんだけど」

「なんだ、誕生日プレゼントに何を買えばいいのかわからないとか？」

「いや、それ以前の問題があるんだよ」

真田はもう一度ファンタを口に入れる。口の中が渴いて、口の中ではじける泡は水分を補給する上で邪魔にしかならなくなつていた。

「それ以前？ 言つてる意味がさっぱりなんだけど」

「実は、まだ返事してないんだよ」

今度は、岡島の時間が止まつたように反応が返つてこなかつた。それどころか椅子に座つて固まつたまま微動だにしない。その脳内では、いま真田が発した言葉がしきりに繰り返されていくのだろうなど、真田は勝手に考えていた。

「えつと、何それ？ 好きな女の子に告られたんだろ？」

たつぱり五秒ほどの反応時間をかけて、岡島が質問する。真田は

そう、とうなずいた。

「で、なんでまだ返事していないわけ？」

真田は、いまだかつてこれほど疑問に満ちた表情を見たことがなかった。それほど、岡島の戸惑いがひどかつたということだろう。

「今回相談したいのは、そのことなんだよ」

「意味がわからん。もつたいぶらずに早く言えよ」

よく言うぜ、と真田は内心で思う。一人目の彼女に告白する前、一人目の彼女にフラれたあと。その両方で相談を持ちかけられた時、岡島はそれはうじうじしていてなかなか言いたいことを口にしようとはしなかった。今考えれば、その気持ちもわからないでもないが。

それでも話すことには前には進まない。真田は残りのファンタをすべて飲み干し、そしてこう言った。

「岡島、どうすれば大人になれると思う？」

岡島の顔がさらに疑問で埋め尽くされる。しかし真田にとつて、この一言より今の疑問を的確に表す言葉はないと思っていた。

「えっと、意味がわからん。話があっちこっち飛んでるんだけど」「飛んでねえよ。きちんとつながってる」

「お前さ、こんなわけのわからないキャラだったっけ？」

「つるせえ。テンパってるからしちゃうがねえだろ」

はあ、とため息をついて、岡島は紅茶を一口飲む。その間に、何から尋ねようか考えているようだった。

「わかった。お前がまじめなのはよくわかつたけど。まずなんで俺にそんなこと聞くわけ？」

「お前が変わったと思うから。もつとよく言えば、大人になつたと思うから」

「大人になつた？ 俺が？」

岡島は素つ頓狂な声をあげた。しかし、真田ははぐらかさずきちんととうなずいた。

「いや、そうでもないだろ。つか、大人になるつてどうこう感じ？」

俺大人になるつてよくわからないんだけど

「なんか、自分の考えをしつかり持つようになつたつていうか、芯が強くなつたつていうか、そういう感じ。なんていうんだろう、少し物事への対応が大人びたつていうか…」

上手く口にできないことを、真田は口にする。それでも、若干一コアンスは伝わったようで、岡島は照れ笑い。芯が強くなりたいと、以前岡島は口にした時があつたのだ。それは恋人にフラれた時だつたのだが。

「いや、そうでもないだろ。お前の言いたいことは何となく伝わつたけど、俺はまだそれほど大人にはなつてねえよ」

「謙遜するなよ。顔が照れてにやけてる」

「なんことねえよ。まあ、うれしかつたのは事実だけだ」

そう言つて岡島はもう一口紅茶を飲む。真田も飲もうとしたが、コップはすでにからだつた。

「んじや、いきなりなんで大人になりたいとか聞いてくるんだ？」

岡島が次の質問に移る。真田は口に何か入れたくて、自分が勝つてきた菓子の袋を開けた。口にお菓子を放り込むと、水分がスナック菓子に奪われて口がまた渴く。

「さつきも言つたじやねえか。好きなやつに告られたつて

「脈絡持たせてしゃべれよ。わけわからないんだけど」

「察してくれ。テンパつてるんだつて」

「…飲み物お代わりするか？」

岡島が気を利かせて聞いてくる。これ以上ぐいぐい聞いても無駄だと思つたのだろう。

「おう、悪いな」

「俺が飲み物持つてくる間に、どうやつて説明するか考えておいて」

そう言つて岡島は真田のグラスを持って部屋から再び出していく。真田は言われたとおり、どうやつて説明しようかと頭を働かせようとした。

しかし、その瞬間浮かんできたのは目の前で「あらを真剣に見つ

めているあの子の顔。とたんに顔が赤くなるのを感じて、真田はスナック菓子を口に放り込む。それでも頭の映像は消えず、それどころか余分な者までいろいろと浮かんでくるため、真田はさうにスナック菓子を口に入れていった。

今度はほとんど時間をかけずに岡島が部屋に戻ってきた。手にはファンタが入ったグラスと、ジュークボトルが握られている。真田が次にお代わりしてもいいようにと持つてくれたらしい。

「で、説明考えたか？」

「だから、告られたとき、考えさせてくれ、って返事したんだって」「テンパリ過ぎだろ！」「ここまでお前が打たれ弱いとは思わんかった」

「悪い。なんかこういう話聞くのはいいけど話したくないんだって」「話すためにここまで来たのにか？ 頼むぜ、おい」

岡島はそう言つて手に持つていたグラスを真田に渡す。真田はお礼を言つて受け取ると、その中身を一気に半分ほど飲み干す。口とのどを程よい刺激が走り、ようやく真田は一息つく。

「よし、なら順番に行こう。まず、お前は好きな子に告られた」

「おう」

「で、考えさせてくれって言つたわけだ」

「そう」

「じゃ、何で好きな子相手に考えさせてつて言つたわけ？」

そこで真田の言葉が詰まる。少しの間部屋に沈黙が降りた。

「だから、俺は大人になりたいんだって言つただろ」

五秒後、ようやく返事をした真田の言葉を聞いて、再び部屋は沈黙が支配する。その言葉の意味を岡島はゆっくりと考え、そしてゆっくりと口を開いた。

「つまり、お前は自分が大人になつてないから断つたのか？」

「断つてねえよ。考えさせてくれって保留にしただけだ」

すかさず真田が反論するが、岡島は気にしない。真田が先ほど開

けたスナック菓子を一つまみ取り、それを口へと運んだ。

「まあ、俺にはどっちでもいいんだけど。まだ俺にはわからん。大人になつていなきことが何で保留にすることになるんだ?」

「なんでって、そりゃお前、その……」

真田は上手く言葉が見つけられずまた口ごもる。頭が上手く動かず、なんとか動かそうとするととたんに告白された時のシーンが頭に浮かんでくる。

「とにかく、断つたんだって！」

「お前さつき保留にしたって訂正したじやん！」

真田の叫び声にしつかりと岡島がつっこむ。もう何が何だか分からず、真田はまたファンタを口に入れて一息ついた。

「なんなんだ？ 大人になつてねえから保留にした？ 大人になつてなきや付き合つちゃいけないのか？」

「いや、だつて、そうだろ。その、もつと自分に自信を持つてからじゃねえと。なんか、しつかり付き合えないつていうか、振られるんじやないかって思つて」

「ぼそぼそといながら、真田はうつむく。もう自分としては理由をしつかり述べているつもりなのだが、岡島はまだ分からぬのだろうか。岡島の反応が気になり、視線をあげると、そこにはこちらを凝視する岡島の顔があつた。

「うおつ、びっくりするなさい。ビデーるからそんなこつち見るなよ」とつさに真田が後ずさると、岡島はすっと視線を外して口に紅茶を含む。それを飲み込んでから、ゆっくりと口を開いた。

「ま、だいたい分かつた。要は、お前は自分に自信がないから、付き合いだしてもすぐに振られるんじやないかって思つて、考えさせてくれつて言つたってことか？」

部屋に再び沈黙が訪れる。ん？ と促すような岡島の視線に促されると、真田はそういうことだと思つ、と呴いた。それを聞いて、

「で、自分に自信を持たせたいから大人になりたいと？ そのため

に大人になつたと見える俺に相談しに来たつてこつ」とか?」

「そう」

「お前、おかしいだろ」

「こきなり笑いだしながら、岡島が言つた。

「おかしくねえよ!」

「おかしいわ。わけがわからねえ。それを保留にするといひじやねえ。つか、保留にした理由がそんなことだつてしたらその子にもバカにされるせ?」

「つるせえな

上手く反論できず、真田はとつあえずそつ返す。岡島はなおも笑つたまま話し続けた。

「こや、そう思つし、実際お前はおかしいだろ。だつて、そこ迷つといひじやねえもん。なんで付き合つ前から振られると考へてゐるんだよ?」

「つるせえな。お前は考へないのかよ!」

「考へてもはじまらねえもん。だいたい、お前は告白されたんだぜ? 告白する前に振られるとは考へるけど、告白されて付き合つだしたこと考へて、その後のことまで考へるとおかしいだろ」「世の中そういうものいっぱいあるじやねえか。そつやつて考へちまつて!」

「んじや、振られればいじやん」

笑いながらそつこつた岡島の言葉に、真田の頭には怒つよりも先に疑問が浮かんでくる。はあ? と素つ頓狂な声をあげると、岡島はさりに続けた。

「振られればいじやん。そんなもん、そつ考へないとやつていけないぜ?」

「こや、振られればつて。それじや付き合つ意味ないんじや…」

「じやあこのまま付き合わないのかよ。それはそれで意味なこじやん」

う、と真田は言葉に詰まる。岡島は笑いながら、さりと言葉を重

ねていく。

「だいたい、自分に自信ないとかで付き合いつの戸惑つてたらダメだろ。これが結婚ならまだわからないけど。自分が安定していない職についてないとか、きちんとやつていける自身がないとか。そういうものはあると思う。けど、付き合いつにはそんなの必要ないだろ」

「でも、やっぱり自身持つた状態で付き合いたいじゃん」

「そんなこと言つてたらいつまでたつても付き合えねえよ。じゃあ仮に、付き合つた時に自分を大人にしようとする。その時、大人になる過程でお前自身の大切な部分まで変わっちゃう可能性もあるわけだ。でも、それじゃダメだろ。その告白してきた子は、今のお前が好きなんだから」

当たり前のこと気にづかされて、真田ははつとなる。岡島はなおも続けた。

「それに、大人になる方法を聞かれても、俺はやっぱり、振られるとしか言いようがない」

いきなりわけがわからぬことを言われて、真田は首をかしげる。

岡島は紅茶をもう一口飲んだ。

「お前が言うみたいに、俺は変わったかもしねえ。大人になつたかもしねえ。でも、それは俺が振られるつていう経験したからだと思う。告白できずに悩んだからだとも思う。大人になるためにはさ、結局そうやって悩むしかないんじゃねえか。いろんな嫌なこと経験して、その都度悩んで乗り越えていくしかないと思う」

その言葉で、真田の胸の中のもやもやが消えていくような気がした。今までかかっていた霧が消えていくような、そんな感覚を覚える。

「いろんな本読むとか、難しい映画見るとか、そういうのも大人になるための条件なんだろうけど、一番大切なのはそういう経験だと思う。で、その嫌な経験から逃げずに悩んで苦しんで、それ乗り越えてやつと大人に近づけるんじゃねえか？ それでいいんじゃね

えか？ 振られて、悩んで、変わつて。またその変わつた自分を、今度は別の人気が好きになつてくれて。そういうもんだと思う」

告白する前に悩み、振られてからはそれをふつ切るのに半年かけ、その都度悩んできた大人の言葉だつた。それらを乗り越えてきたからこそ言える、重みのある言葉。その言葉の中には、確かに岡島が大人になつた背景が、悩みが、苦しみが、経験がこもつていた。「だから、お前も付き合え。そんで振られる。振られればそれにまた悩んで成長すればいい。将来別の人と結婚するときの肥やしにすればいいじゃねえか。そんな悩むな」

真田の顔が、ゆっくりと笑顔に変わつていく。この家に来て、初めて見せる照れ笑い以外の笑顔だつた。

「なんか、俺はお前の力になつてやれなかつたのに、お前には助けられてばっかな気がする」

「そんな事ねえよ。告白するときも、フラれた時も、話聞いてくれただけで結構助かつたんだぜ？」

その言葉が本心かどうかはわからないが、真田は心底こう思つた。こいつと友達になれて、本当に良かつた、と。

春。昼間。誰もいない体育館。少し離れたところにはキャンパス。目の前には、緊張した表情のあこがれの相手。

胸の動悸が高鳴るのを感じる。これから始まる新しい生活に、不安と期待が混ざつた緊張感が体を駆け巡る。

大きく息を吸い込み、吐き出し、また吸い込んで。大きな一步が、踏み出された。

(後書き)

岡島「前書きにも書かれてるけど、このシチュエーションはないだ
る」

真田「世の中の恋に悩める人全員に喧嘩売つてるよな」

作者「ごめんなさい！作者も恋に悩んでいる人間なので許してください！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5013o/>

大人へ

2010年10月24日22時25分発行